

前期：現代キリスト教思想研究1——近代から現代へ

オリエンテーション——現代キリスト教思想の諸動向

1. 西欧近代とキリスト教
2. 自由主義神学1——シュライアマハー
3. 自由主義神学2——リッチェルとハルナック
4. 自由主義神学3——トレルチ 5/16
5. ヘーゲルとヘーゲル主義 5/23
6. 近代聖書学と宗教史学派 5/30
7. キリスト教と社会主義 6/6
8. 弁証法神学1——バルト 6/13
9. 弁証法神学2——ブルトマン 6/20
10. 弁証法神学3——ティリッヒ 6/27
11. 解釈学的神学とブルトマン学派 7/4
12. 研究発表 7/11
13. 研究発表 7/18
14. 研究発表 7/25

<前回>シュライアマハー

(1) シュライアマハー(Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher, 1768-1834)の特徴

①近代プロテスタント神学の父

啓蒙主義的な神学的合理主義と伝統主義との間・総合

同時に、近代解釈学の父、現代宗教学（宗教現象学）の父

②啓蒙思想とロマン主義の総合

③解釈学・弁証法・倫理学、体系家→信仰論（『信仰論』（Glaubenslehre））

Dogmatik から Glaubenslehre へ
自由主義神学

(2) 『宗教論』の信仰概念

1. 信仰・宗教の規定

意図：宗教の独自性—宗教学の基礎、宗教哲学

宗教多元性の問題（第五講）

2. 形而上学・倫理学との区別

宗教の本質について（宗教本質論・第二講）→「直観・感情」（「本質—現象」の枠）

3. 思想史における位置づけ

近代的な宗教研究の広範な領域に対して、その起点となった。

①宗教・信仰の直接的場へ「感情」「直接意識」 → 宗教現象学へ

②人間性における宗教 → 弁証神学、宗教の本質概念（本質論から現象論へ）

③「感情」から「認識」「行為」へ → 人間の存在構造における宗教性

④実定性 → 個別的で歴史的な諸宗教への定位 cf. 理神論

高次の实在論

説教者

↓

自由主義神学の父、しかし自由主義神学の枠には収まらない。

(3) 『信仰論』の意義

4. 教義学の新しいスタイル

- ・経験から教義へ
- ・諸学の体系内における神学の位置づけの明確化
倫理学、宗教哲学、弁証学からの借用命題から神学本論へ
「神」という言葉の規定

5. 『信仰論』序説 (Einleitung)

「§ 2 教義学は神学的学科であり、それゆえもつばらキリスト教会と関係しているのだから、それが何であるかを説明することが可能になるのは、キリスト教会の概念について了解されている場合に限られる。」(Schleiermacher, 1830, 10)

「§ 3 すべての教会共同体の基礎である敬虔さは、それだけで純粋に考察される場合、知や行為ではなく、感情の、あるいは直接的自己意識の規定された形態なのである。」(ibid., 14)

「§ 4 敬虔さの表出はたとえどんなに多様であっても、敬虔さを他のすべての感情から区別することを可能にする敬虔さの諸表出すべてに共通なもの、つまり敬虔さの自己同一的な本質は、次の点に存する。すなわち、それは、我々が自らを絶対的に依存的であると意識していること、あるいは同じことであるが、我々が自らを神との関係性において意識しているということである。」(ibid., 23)

3. 自由主義神学 2

——リッチェルとハルナック

(1) 自由主義神学とは何か

1. Liberal Protestantism

A movement which became of particular significance in nineteenth-century Europe and North America, stressing the importance of the religious personality of Jesus, and committed to an optimistic view of human nature and an evolutionary understanding of the nature of cultural development. See Liberalism (Britain and USA); Modernism; Protestant Theology (Britain; Germany; and USA) (p.320)

2. 自由主義 Liberalism

「自由主義を定義する際には、プロテスタント自由主義とキリスト教神学における自由主義的な視点とを区別しなければならない。前者は 19 世紀から 20 世紀初頭にかけて盛んであった神学運動であり、後者は物の見方として、現代の神学者の中にもそれを持つ者があり、古代にもいたのである。プロテスタント自由主義と呼ばれた 19 世紀の神学運動は I. カント(1724-1804)や F. シュライエルマッハー(1768-1834)などの思想に根差したもので、A. リッチェル(Albrecht Ritschl, 1822-89)の著作によって典型的に代表される。」(303)

詳細は、コピー

3. Liberal /Positive

(2) リッチェルとその学派

1. リッチェル (Albrecht Ritschl, 1822-1889)、ドイツ・ルター派組織神学者。ベルリン生まれゲッティンゲンで死去。

『古カトリック教会の成立』(Die Entstehung der altkatholischen Kirche, 1850)

『義認と和解についてのキリスト教的教説』3巻 (Die christliche Lehre von der Rechtfertigung und Versöhnung, 1870-74)

19 世紀最後の四半世紀のドイツ神学、およびアングロ・サクソンのプロテスタント神学にとって大きな力を及ぼす。

J.W.ヘルマン、Th.カフタンら、リッチェル学派。(『キリスト教人名辞典』日本基督

教団出版局、より)

2. 大木英夫『終末論』

「終末論が知的世界に復権せしめられるのは、二十世紀にはいつてからである」(115)

・「カントの終末論」「『万物の終り』("Das Ende aller Dinge") 1794」

「正統主義者がヨハネ黙示録を文字どおり受けとって構成する「万物の終り」の教説を、彼の批判哲学の立場から批判した」、「ヨハネ黙示録的終末論的描写を、自然的・物理的な見方であると否定し」(119)、「物理的」にでなく、「道徳的」に理解されるべきだということである」、「理論理性」の対象ではなく、「実践理性」の対象、「実践的に有意義なもの」の比喩的な説明だということである」(120)、「時空を超えた別種の次元に移行せねばならないと考える。それは道徳的次元である」(121)。

「批判的終末論とは、終末論の倫理化、すなわち倫理的終末論にほかならない」(121)、「終末論は、倫理を最高善へと無限に引き上げるという仕方で作用し、実践的道徳的系列へと転轍せしめられるのである」、「万物の究極的目的」とは「最高善」にほかならない。それは世界の終りの日々の想像図ではない。この最高善なる「万物の究極的目的」に「完全に適応するとき措置をとって誤らない理性」は、ひとり神にのみ存する、とカントは考える」(122)、「こうして終末論は、幻想的思弁であることをやめ、人間の最高善をめざす謙虚な努力として再生されてくるのである。終末論は「歴史」の事柄ではなく、「倫理」の事柄となるのである」(123)。

・「カントとリッチェルの関係は、終末論の倫理化において興味ぶかいつながりを示している」、「カント的な仕方で倫理化されている」(123)、「新約聖書的であるよりは、いちじるしくカント的」(124)

「『義認と和解』の第二巻」「きわめてカント的色彩が濃厚なもの」(124)

「選ばれた者たちを、最高善と見なす神の国」「へとはいらしめるよう教育すること」、「神の国」「愛の動機にもとづく行為による人類の有機的結合」、「最大のひろがり[国民]的差別を越えた」と、最も包括的な動機[愛]という二つの道徳性の共同体」は「神の国として把握され得る」、「神の国」は「道徳性」(Sittlichkeit)と結びつけられて理解されている」(125)、「神が人間に実現したもう最高善であり、同時に人間の協同の課題である」、「神の国」の概念は、巧妙に道徳性と結び合わされ、近代世界に有効なものとして化せられた、「リッチェルの「神の国」の概念の倫理化は、決して個人化や内面化ではない、「社会的要素」はたくみに保存されている。それは人間が共同して達成すべき理想的な社会状態と考えられているからである」、「これは歴史内在的な目標である」、「神の国」概念は、非終末論化され、倫理化された」(126)

・「リッチェルの二人の弟子たち」、「ヘルマンは「神の国」を人間の心の中の「神の支配」と解釈し、それを内面化・精神化した」、「ハルナックに対しては「世界の喪失」を語ることは見当ちがいになる」「彼自身の思想として社会的関心をもった神学者であった」(127)。

3. 森田雄三郎『キリスト教の近代性』第四章

・「リッチェルによれば、かかる歴史的個体的な人格性の力と、その自由な相互作用が、歴史的キリスト教を形成するのである」(163)、「人格的個性性を歴史的運動力として把握しようとする」(164)

・「イエスの人格」「このイエスの歴史的的人格的啓示を通してのみ、信仰者は神との有意義な交わりを持つことができる」、「イエスを通しての有意義な交わり」、「イエスは歴史学的対象であると同時に、認識主体に関わる歴史的対象でもある」、「歴史的」とは、時間的現象的過去の事実を指すと同時に、この事実の「価値」をも意味する、「価値認識は「交わり」にもとづく」(166)、「組織神学は、価値判断によって全体的意味連関を認識

する」(167)、「教会は「義認と和解」によって「イエスとの交わり」もしくは「神との交わり」に立っている。この交わりにおいて、キリスト教的価値を「教会の根源的意識」に相応して自覚することが、組織神学の課題となる」(167)、「交わり」と価値の自覚」(168)・「教会の根源的意識」に即応した「交わり」とその価値の自覚は、リッチェルでは「目的論的」と呼ばれる、「神の究極目標が神の国において具現されている」、「リッチェルによれば、シュライエルマッハーが神の国とイエスの贖罪をキリスト教理解の二つの中心点としたことはたしかに正しい」(169)、「楕円二焦点的＝目的論がリッチェルの本来的意図なのである」(171)

「罪のゆるし」と「義認」は神の自己目的である神の国への主観的意志の方向付けである」(174)、「神の恩寵」「神の側からの一方的作用であり、カント的表現を使用するならば、「分析的」な作用である、「神の独自の「分析的」恩寵と、「総合的」な「罪のゆるし」および「義認」は、いずれも真である」(175)、「神的絶対的意志と人間的意志とはな必ずしも対応せず、人間的自由の本質的原理と格率とは必ずしも一致しないからこそ、歴史的人格の現実だからであり、リッチェル神学はかかる歴史的人格の現実を見落とすからである。そこに二焦点説は一焦点になってしまいます。宗教は倫理へと、人間の根源的受動性は自発性へと吸収される傾向を示すのである」(177)

・「リッチェルの神論は、「神は愛である」という表現につける。およそキリスト教における神認識の決定的根拠は、イエス・キリストの人格的啓示にある」(178)、「リッチェルの語る人間の価値は、イエス・キリストが教会の主であるという事実に基づき置く」(179)、「神の恩寵の一方的独自の分析的な愛と、人間体験における愛の「総合的」性格という二重性を、リッチェルはいみじくも洞察しながら、実際上は後者のみを論じるのである、そのことによって愛の全体的理解を歪曲するのである」(180)。

(3) ハルナック

1. ハルナック(Adolf von Harnack, 1851-1930)、ドイツの神学者、教会史家。ベルリン大学で長く教会史を講じ(1889-1921)、同神学部の名声を世界的にする。1890年プロイセン学士院会員、プロイセン国立図書館館長(1905-21)、1911年にカイザー・ヴィスヘルム学術振興協会総裁を歴任。

『教理史教本』3巻(Lehrbuch der Dogmengeschichte, 1885-89)

『初期三世紀におけるキリスト教の宣教と伝播』2巻(Mission und Ausbreitung des Christentums in den ersten drei Jh. en, 1902)

『マルキオン』(Marcion, 1921)

キリスト教と文化の総合、バルトとの論争。

2. 「ハルナックはいわばビスマルクの政策を宗教的な側面から支える「御用神学者」であった」(深井、32)、「神学の道德化と教会の国教化への支持」(158)。

cf. オーファーベック、ニーチェ

3. ハルナック『基督教の本質』(Das Wesen des Christentums, 1900)
(山谷省吾訳、岩波文庫)

目次 (第1講～第16講義)

問題の提出とその限定

第一 福音

序説及び歴史的事項

一、イエスの説教の特質

神の国とその到来

父なる神及び人間靈魂の無限の価値

キリスト教思想研究入門

より勝れたる義と愛の命令

二、福音と個々の事項との関係

福音と此世——禁欲の問題

福音と貧乏——社会の問題

福音と法律——地上的諸秩序の問題

福音と労働——文化の問題

福音と神の御子——基督論の問題

福音と教理——信條の問題

第二 歴史上に於ける福音

一、使徒時代に於ける基督教

二、カトリク教への発展途上にある基督教

三、希臘カトリク教に於ける基督教

四、羅馬カトリク教に於ける基督教

五、プロテスタント主義に於ける基督教

註

4. 抜粋・引用

・「第一講」

「彼の説教が実際どんなものであったか」、「現代の諸文献に尋ねるならば」「相容れない声の喧しさを聞かざらう」(21)、「一体ある歴史が我々に何の関係をもち、一千九百年の昔に生きていた人物が我々に何の関係を持つか。我々の理想並びに力は、現在のものでなければならぬ」(23)、「その死亡証明書を既に示すことが出来ると信ぜられている宗教を更に知ることは、我々の要求でなければならない。然し、事実上今日此宗教並びにその為めへの努力は、以前よりも活気を加えている」(24)、「即ち基督教とは何か、その起源と発展とはどうかについて、解答を試みようと思う。我々は、此問題の解答から自然に、宗教とは何か、それは如何なる関係を我々に持つべきかと云う更に広汎な問題にも、光明が投ぜられると望んでいる。然し、我々はそれ等の中で只単に基督教のみについて述べよう」(25)

「基督教とは何か」「歴史学的方法により、且つ体験された歴史から得られた生活経験に基づいて、答えようと思う。従って弁証論的並びに宗教哲学的の考察は、之を除外しよう」(25)、「我々の課題は依然、基督教とは何かと云う純歴史的題目である」、「我々は何処に資料を求むべきか。イエス・キリストと彼の福音と云う簡単で十分な答えで、尽きている様に思われる」、「各々の偉大な、力ある人格は、その本質の一部分を、彼が働きかけた人々において初めて現わすからである」「イエス・キリストの説教のみに限定する場合には、何が基督教的であるかとの疑問に対する完全な巻頭を得ることは、不可能である」「彼において何を体験したかを彼等から聴かねばならない」(29)、「大切なのは」「教理ではなく、常に新たに点火されて自らの焔で燃える生命である」、「基督教の真価も、その全歴史よりの完全なる帰納に基づいてのみ定めることができるのである」(30)、「現象中の重要なものを捉え」(31)

「彼の時代に立っていた」、「彼に特有の素質と時代との係数なくして、ある人につき何事をも、全く何事をも考え語り為すことは出来ないことである」(31)、「可能な道」「福音は、凡ての部分において、その最初の形式のものと同一であるとするか」「又は歴史的に変化する諸種の形式の中に常的なものを含んでいる、とするかである。第二の見解が正しい」(32)、「原始時代のみならず全時代を通観することによって、実際我々は重要なもの及び価値あるものに対する我々の標識を確実ならしめるのである」(33)

「第一にイエス・キリストの福音を論じよう」「次に我々は、彼自身と彼の福音とが初代

の弟子に与えた影響を見よう」「最後に、歴史に於ける基督教の重要な変遷を追跡し、その大いなる類型を認識しようと思う。福音によって統整された凡ての此等の現象に共通なもの、並びに歴史によって統整された福音の特質は、我々を事物の真相に近づけるだろうと期待して差し支えなかろう」(34)。

「イエスの興味の中心」「福音の崇高は、終に此等の対立に打ち勝ち其上に超越した所にある」(35)

「絶対的の判断を歴史学においてはなし得ない事」、「僭越に考えてはならない」「主観的事実」(36)

・「第二講」

「第四福音書」「は、普通の意味の歴史の材料として使用することは出来ない」(38)

「此等の福音書は『党派的書物』でもないし、又未だ希臘思想によって著しく影響されてもいない」(39)

「奇蹟的なもの、凡ての奇蹟の記事は、之をどう処理するか」(42)

「彼等にとっては」「単に異常な出来事」(43)、「因果律の破壊としての奇蹟ではないこと」(44)、「それらが単に空想であり、比喩的であるとしても、宗教の存する限りは続くものと思われる」(45)

「重要なのは奇蹟ではなく、人類は無慈悲な必然に助けなく縛られているか、それとも、万物を支配する神」が、「此世に存在するかという決定的な問題である」(48)

「沈黙の三十年」

・「第三講」

「イエスの説教を通観する時、之を三つの項目に分けることが出来る」、「第一、神の国とその到来」、「第二、父なる神と人間靈魂の無限なる価値」、「第三、より勝れたる義と愛の命令」、「イエスの説教の偉大と力は、それが極めて単純で同時に豊富である所にある」(67)

「イエスの神の国の説教は、一方旧約的色彩のある、預言者的な審判の日と将来現われ目に見ゆる神の支配との告知から、他方現在イエスの使命と共に始まる内的な神の国の到来の思想に至るまでの、あらゆる表出と形式とを含んでいる」(68)。

<文献・参考文献>

0. リッチェル「キリスト者の完全性」「義認と和解」(『現代キリスト教思想叢書1』(白水社)。

ハルナック『基督教の本質』岩波文庫。

1. 熊野義孝「現代の神学」「第二章 神学と宗教哲学との交渉」「一 自由主義神学と宗教哲学」(『熊野義孝全集 第十一巻 歴史と現代下』新教出版社)。

2. 佐藤敏夫『近代の神学』新教出版社、1964年。

第三章 リッチェルとその学派

第一節 リッチェルの神学 第二節 リッチェル学派

3. 森田雄三郎「第四章 神学的歴史理解における人格性の意義 (A・リッチェルの価値判断)」(『キリスト教の近代性』創文社、1972年)。

4. 大木英夫「第三章 二十世紀における終末論——研究の概観」「一 前史」「2 リッチェルの「神の国」の理念」(『終末論』紀伊國屋新書、1994年(1972年))。

5. 深井智朗『ハルナックとその時代』キリスト新聞社、2002年。

6. A. リチャードソン/J. ボウデン編『キリスト教神学事典』教文館、1995年。

7. Alister E. McGrath(ed.), *The Blackwell Encyclopedia of Modern Christian Thought*, Blackwell, 1993.